原 著

中堅看護師の看護実践能力向上にむけた取り組み

堀　川　ちか子
済生会滋賀県病院　６階西病棟

論文受付　2018年５月31日
論文受理　2018年11月15日

目　　的

少子高齢化，医療技術の進歩，社会ニーズの多様化と医療･看護を取り巻く環境の変化は激しく，それに伴い質の高い看護が求められている．質の高い看護には，看護師の実践能力向上が不可欠である．当病棟の中堅看護師は，リーダーやパートナーシップ・ナーシング・システム（以下PNSと略す）で後輩と組むことが多くなった頃より，インシデントの増加，患者・家族からの態度や技術に対する苦情等，知識や技術の未熟さが浮き彫りとなった．ベナーの成長モデルでは，広い視野を持ち看護実践の役割モデルとしての教育的な関わりを担っていかなければならない．しかし，現状はそのレベルに達しておらず，中堅看護師の看護実践能力の向上が必須であると考え，中堅看護師の看護実践能力向上にむけて取り組んだ．その取り組みについて報告する．

病 棟 紹 介

血液・呼吸器・内分泌の混合内科
看護配置基準：７対１
看　護　方　式：固定チームナーシング＋PNS
看　護　師　数：30名
（認定看護師１名，糖尿病療養士２名，現在認定課程受講中２名）

方　　法

対象：中堅看護師２名
期間：平成29年３月～平成29年９月
方法：

１．取り組み前の個別面談
現在の自己評価や学習状況について確認し，現在の課題と本人達の希望を把握した．

２．月１回の勉強会の実施
参加者：病棟の現任教育担当者（以下指導者と記す）１名と中堅看護師２名
場　所：カンファレンスルーム等個室
時　間：１時間半～２時間
１回目の勉強会のテーマは指導者が決定し事前課題あり．２～４回目は指導者と中堅看護師と一緒にテーマを決めた．中堅看護師の負担感があり事前課題はなし．５回目から中堅看護師でテーマを決め，事前課題なし．勉強会のテーマは，１回目「点滴、注射」２回目「清潔操作、消毒」３回目「心不全」４回目「フィジカルアセスメント」５回目「胸腔ドレーン」６回目「酸素療法」

３．勉強会後に日々の振り返り
日々の実践の中で勉強会の内容が活かされた場面や意識や行動が変化し意識変化について話す時間を設けた．

倫理的配慮

本報告は強制ではなく任意であること，報告後不利益を生じることはないことを説明し，書面にて同意を得た．本論文は本院倫理委員会の承認を得ている．

結　　果

1．インシデントについて

- インシデント件数

取り組み開始後は，取り組み前より46.7％減少した（図1，2）．

- インシデント内容

取り組み前，知識不足や手技等実践場面でのインシデントが80％であったが，取り組み後，知識不足や手技等実践場面でのインシデントは25％に減少した．残り75％は，食事変更忘れや転倒等であった．

2．現場での実践

中堅看護師の意見より「勉強会で学習した内容が臨床の場面で活用できた．」「創傷時の消毒の選択に活かせた．」「勉強会で学んだ内容を観察に取り入れられた．」「アセスメントしてから医師に報告できた．また，報告のタイミングを考えることができた．」「自信がない時はその場で調べるようになった．」と勉強会の内容や振り返りが実践につながった．

3．意識の変化

取り組み前は「勉強会に強制感を感じていた．」「課題に対して負担感がある．」「どうして自分達だけ対象なのか．」と消極的であったが，取り組み後は「自分達だけのためにはもったいない．」「自己学習ではここまではわからない．」「あいまいな理解だったことが理解できて楽しい．」「次は○○を勉強したい．」と積極的な発言となり，意識の変化がみられた．しかし，事前課題に対しての負担感は取り組み前後で変化はなかった．

考　　察

今回の勉強会では，説明，演習・事例，講義の順で行った．演習や事例は，中堅看護師のインシデントや患者への実践場面を取り入れた．この方法は，「準備」「説明」「演習・事例」「講義」の順で実施し，既存の知識を実践に結び付けるシミュレーション教育と類似していた．また，勉強会後に振り返りの時間をつくり，中堅看護師自身に実践体験や思いを表出してもらい，「何を考えて実践したのか」「実践後どうだったか」「どうすればよかったのか」「次にどうするのか」を一緒に振り返った．この振り返りは，「記述･描写」「感覚」「評価」「分析」「統合」「行動計画」を行うリフレクションに類似していた．看護実践能力の向上には，シミュレーション教育やリフレクションが効

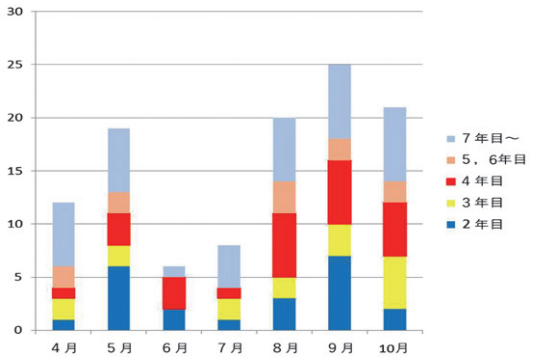

図1　取り組み前のインシデント件数

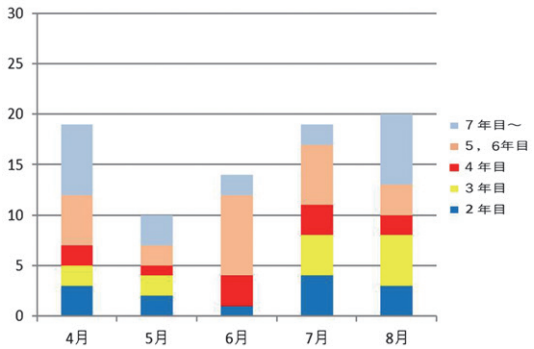

図2　取り組み後のインシデント件数

果的だと言われている．２つの効果的な教育方法と類似した勉強会や振り返りであったことが結果につながったと考える．それに加え，今回の取り組みでは，行った環境が重要であったと考える．勉強会や振り返りは，中堅看護師２名と指導者の少人数で行った．中堅看護師と積極的にコミュニケーションを図り，話せる関係性の構築に努めた．話せる関係性の同期・指導者との少人数で対話をとりいれたことが，活発な意見交換や質問，率直な思いの表出につながり中堅看護師の理解が深まったと考える．病棟では，先輩後輩が一緒にうける大人数での勉強会が多い．大人数だと，後輩や先輩の前で間違えたら嫌だという思いやプライドから，意見や質問，思いを素直に表出できないと考える．実際に，中堅看護師からも「人数が増えるとここまで質問したりできない.」と意見があった．

今回の取り組みでは，この話せる関係性の少人数で対話を取り入れたことが特に効果があったと考える．

中堅看護師は成人学習者である．マルコム・ノールズはアンドラゴジー理論の中で，成人の学習者の特性として１．学習者の自己概念の変化，２．学習者の経験の役割，３．学習へのレディネス，４．学習への方向づけ，５．学習への動機づけの５つの要素をあげている．今回の取り組みでは，２．学習者の経験の役割，３．学習へのレディネス，４．学習への方向付け，５．学習の動機付けの４つの要素を捉えられていたと考える．

２．学習者の経験の役割

人間は成長するにつれて多くの経験を持つが，これは学習のための資源となる．中堅看護師の取り組み前の知識や手技の未熟によるインシデントは，過去に自己学習していたが忘れてしまったことで発生したものもあった．インシデントや患者事例を用いることで中堅看護師の経験が学習の資源となったと考える．

３．学習へのレディネス

学習する際に必要となる準備状態のことであり，人生上の課題や問題から生じる．仕事や社会や家族における役割，個人のもつ責任の範囲などが大きく変化する時期があり，こうした変化は，学習の機会を生み出すことである．中堅看護師は，看護実践の役割モデルやリーダーを担う時期である．しかし，知識や技術が未熟である中堅看護師は，責任やプレッシャーから，心理的に受け入れられず，学習の機会につながらなかったと考える．今回の取り組みで，中堅看護師は，知識や技術を勉強会で習得し，実践につなげ成功体験が得られた．その成功体験を先輩，上司に認められたことがさらなる学習意欲へつながり，学習へのレディネスをもたらし，意識の変化につながったと考える．

４．学習への方向づけ

成人の学習への方向づけはより即時的で，問題解決・課題達成的なものが多い．臨床現場は常に患者の状態が変化しているため，看護師の学習は即時的で問題解決型である．中堅看護師は，実践へのつながりや成功体験を得たことで，「わからない手技は調べるようになった.」という行動に変化し，知識や手技に関連するインシデントが減少したのではないかと考える．

５．学習の動機付け

成人の学習への動機づけでは，内在的なものがより重要となる．興味があることや学びたいことを表出できるように関わったが，それよりも，勉強会での学びを実践につなげられた経験が次の学習への動機付けとなったと考える．

しかし，１．学習者の自己概念変化の特徴を捉えられていなかった．

１．学習者の自己概念の変化

人間は成熟するにつれ，自己概念が依存的なものから自己決定的なものに変化するが，すべての成人が自己主導的に学習するとはかぎらない．しかし，受動的な学習は，場合によっては自己主導的な学習そのものを辞めてしまうこともある．中堅看護師は取り組む前から自己主導的な学習が乏しかった．１回目に課題を出した時の中堅看護師の反応から，自己主導的学習を促すことがモチベーションの低下につながって

しまうのではないかと考え，受動的な勉強会を継続し，自己主導的学習を促す関わりが出来ていなかった．その対応が，中堅看護師の能動的な学習への取り組みや意識を弊害していたのではないかと考えられ，今後の課題である．

結　　論

- 今回の取り組みは，リフレクションとシミュレーション教育に類似していたが，少人数制での対話を取り入れた関わりが実践能力向上には重要である．
- 成人学習者への教育は，成人学習者の特徴を理解して関わることで効果がある．
- 能動的な学習を促すための関わりが今後の課題である．

お わ り に

今回の取り組みを今後の後輩指導へ活かし，病棟風土を変える実践力を持つ看護師育成のための病棟教育計画を確立していきたい．

参 考 文 献

1）マルカム・ノールズ（著者），堀 薫夫，三輪建二（翻訳）：成人学習者とは何か－見過ごされてきた人たち，鳳書房，2013
2）阿部幸恵：看護のためのシミュレーション教育，医学書院，2013
3）田村由美，池西悦子：看護教育・実践にいかすリフレクション－豊かな看護を拓く鍵，南江堂，2015
4）井部俊子，中西睦子，手島 恵：成人学習テキスト　第２版看護における人的資源活用論，日本看護協会出版会，2016
5）織井優貴子．シミュレーション教育・評価・定着の工夫．看護人材育成．2015；10・11月号；2-40